

沖縄の子供の貧困に関する島尻大臣と学生ボランティア等との懇談（議事概要）

1. 日時：平成 28 年 5 月 22 日（日）14:00～15:00

2. 場所：那覇市牧志駅前ほしぞら公民館（琉球大学サテライト那覇キャンパス）（沖縄県那覇市）

3. 出席者

（1）大学コンソーシアム沖縄関係者

瀬名波 大学コンソーシアム沖縄代表理事、大城 大学コンソーシアム沖縄副代表理事（琉球大学学長）日笠 大学コンソーシアム沖縄事務局長、本村 子どもの居場所学生ボランティアセンターセンター長、嘉納 子どもの居場所学生ボランティアセンター副センター長、屋良 子どもの居場所学生ボランティアセンターコーディネーター

（2）学生ボランティア等

石井 名桜大学 4 年生、比嘉 名桜大学 3 年生、白木澤 名桜大学 2 年生、平瀬 名桜大学 2 年生、城間 琉球大学 3 年生、仲村 琉球大学大学院 1 年生、小嶺 琉球大学 3 年生、渡嘉敷（初）沖縄国際大学 4 年生、渡嘉敷（萌）沖縄国際大学 3 年生

（3）内閣府

島尻 内閣府特命担当大臣、藤本 沖縄振興局長、古谷 大臣官房審議官、池上 沖縄振興局総務課事業振興室長

（4）沖縄県

山城 子ども生活福祉部子ども福祉統括監、喜舎場 子ども生活福祉部子ども未来政策室長

4. 議事概要

議題 1：大臣挨拶及び大学コンソーシアム沖縄代表理事の挨拶

（島尻 内閣府特命担当大臣）

- ・ 昨年 10 月より子供の貧困問題に取り組んできたが、今年 4 月から「沖縄子供の貧困緊急対策事業」として本格的に動くことになった。
- ・ 事業を進めるにあたっては、学生ボランティアとの連携が大事になってくる。コンソーシアムで、学生ボランティアのマッチングを行う「子どもの居場所学生ボランティアセンター」を創設いただいたことに感謝を申し上げる。
- ・ コンソーシアムとの連携を通して、有意義で有効な施策を実行するべく頑張りたい。

（瀬名波 大学コンソーシアム沖縄代表理事）

- ・ 大学コンソーシアム沖縄は平成 26 年 9 月に開設された。国内外からの有識者を招いてのシ

ンポジウムや小中高大の連携活動、教職員の研修、交流及び情報交換等を行い、地域社会活性化に取り組んでいる。

- ・国、県、各市町村が主体となり、集中的に子供の貧困対策に取り組んでいるところである。その中で大学コンソーシアム沖縄が、子供の居場所に学生ボランティアを派遣することは大きな意味を持つ。

議題2：子供の居場所学生ボランティアセンターの事業説明

(本村 子供の居場所学生ボランティアセンター長)

- ・大学コンソーシアム沖縄に加盟する県内11大学、短大、高専の学生からボランティアへの参加を募る。
- ・子供の居場所に学生ボランティアが派遣される。派遣先では学生ならではの支援を期待する。
- ・参加する学生へは、有償ボランティアとしての支援を行うだけでなく、年3回の参加学生支援制度で、対人援助の専門家に参加してもらいゼミ形式で学生へアドバイスを送る。居場所へ派遣する学生のグループは他大学との組み合わせにしたいと考えており、大学生同士の交流が深まり、将来について話し合えるなど、学生へのメリットがあるようにしたい。

議題3：学生ボランティアからの活動紹介

(石井 名桜大学4年生)

- ・名桜大学、名護市社会福祉課、名護市教育委員会が連携して、学習支援教室ぴゅあを運営。
- ・会場は名桜大学内で、月、火、水の週三日、名護市内に無料循環バスを走らせ子供たちの送迎を行っている。
- ・当初は生活保護世帯のみを対象とされていたが、現在は準要保護世帯、それ以外の生活困窮世帯に属する子どもまで対象とする。
- ・名護市内の中学1年生から中学3年生を対象とし、現在は中学2年生、3年生の50名が登録。彼らに対して学習支援する学生が15名。学生は、教員免許取得を目指す者が多い。

(比嘉 名桜大学3年生)

- ・今年の6月末から、名護市内で小学生を対象とした第二教室を開設予定。
- ・第二教室は、学習支援というよりは子供の居場所として運営する。支援内容については、今後子供の様子を見ながら検討していく。

(城間 琉球大学3年生)

- ・中学生を対象に、島添の丘という児童養護施設内で週1回学習支援を行っており、毎週5、6名の生徒が来る。3名の学生ボランティアと1名の施設職員で運営。
- ・普段は大学で理系科目を学んでいないため、家庭教師のように教えるだけでなく、中学生と一緒に問題を解く時間を大切にしている。
- ・学生ボランティアは、中学生にとってのお兄さん、お姉さんのように接することができるのがメリットである。
- ・将来の夢や大学の話などをすることがある。参加する中学生が会話の中で大学に興味を持てれば、大学進学率が上がるきっかけになるのではないかと。

(仲村 琉球大学大学院1年生)

- ・マザーズスクエアゆいはあとで学習支援を行っている。
- ・小学校高学年は学習の習慣をつけることを目的としている。中学生は受験に向けての学習支援を目的としている。
- ・4月より、一人親家庭の小学生全学年を対象に応援クラブと呼ばれる学童クラブを設置。近くの公園で遊んだり、室内で勉強をしている。

(渡嘉敷(初) 沖縄国際大学4年生)

- ・宜野湾市役所と連携し、学習応援プロジェクトを実施。宜野湾市に住む一人親家庭の中学生を対象。会場は沖縄国際大学の教室。
- ・昨年度、9名の中学生が登録し、最後まで通ったのは5名。ボランティアは、12名が登録されている。
- ・学習だけでなく、映画鑑賞やスポーツ大会等のイベントを企画している。学習の支援よりも中学生の居場所をつくる目的で取り組んでいる。
- ・中学生自らが、学習習慣を身に付けられるように応援する。大学生と接することで、将来を考える時間をつくってもらえる活動になるように、学習支援ではなく、学習応援という名称にしている。

議題4：意見交換

(仲村 琉球大学大学院1年生)

- ・学生ボランティアならではの役割としては、教師でないことが一番大きい。地域のお兄さんのような存在になれる。教師よりも大学生は子供との距離が近いために、親しくなれ、子供の本音を拾うことができる。把握できた問題について相談に乗り、解決することもできる。

(渡嘉敷(初) 沖縄国際大学4年生)

- ・自身が、中学生、高校生の頃何をしていたのか、大学生活で何を学んでいるのかを話すことができ、子供が将来のイメージを持つことができることが、学生ボランティアのよさだと思う。

(小嶺 琉球大学3年生)

- ・自分は教員志望ではないが、将来に向けてのステップということではなく、子供と接することが好きで学生ボランティアに参加している。

(渡嘉敷(萌) 沖縄国際大学3年生)

- ・自分は大学で心理学を学んでいる。中学生と関わることで将来につながると考える。

(平瀬 名桜大学2年生)

- ・居場所を求めて来ている子供は、親が夜に仕事に行くなどのため、学校での出来事を話すことができない。その子供たちの話を聞いてあげるの大きな役割である。
- ・勉強したい子、居場所を求める子など、様々なニーズに合わせる必要がある。
- ・学習面で成績がよくない子でも、通い続けることで学習意欲の向上、学習習慣を身に付けることができる。
- ・周囲に認められることがない子供が多い。子供は認められることを求めていることから、学生がその役割を担っている。

(石井 名桜大学4年生)

- ・一人一人通ってくる子供の求めているものは違うが、学習支援を求めて来ている子供も、居場所を求めて来ている子供も、よい顔をするのは話を聞いてあげている時。
- ・どんな些細なことでも、例えば自分で鉛筆を持ってきたなどでも褒めてあげることで、自分に自信を持てるようにしたい。

(白木澤 名桜大学2年生)

- ・子供たちがどのような支援を求めているかを考えるよりも、私たちに何ができるかを考えることがとても大事である。
- ・学校に行けても保健室登校する子供や、学校に行けない子供であっても、居場所には来やすいような環境をぴゅあが作ることが大事である。

(渡嘉敷(初) 沖縄国際大学4年生)

- ・現状は学生が集まって運営を行っているが、1、2年生が足りず、学生の確保が課題となっている。今後学生を確保し、継続していくためには、団体として運営をすることも考えている。

(比嘉 名城大学3年生)

- ・子供の生活状況はプライバシーに当たるため、学生と役所との情報共有が難しいと感じている。どこまでの情報を学生が知っていてよいのか分からない。

(小嶺 琉球大学3年生)

- ・学習支援の場には来てくれているが、学校は不登校になっている子供がいる。学習支援は行えるが、不登校などの問題についてどのようにアドバイスをすればよいか。

(城間 琉球大学3年生)

- ・子供が悩みを相談してくれた際に、私たちが子供の悩みをサポートできる自信がない。サポートする学生のスキルを上げることが課題である。

(本村 子どもの居場所学生ボランティアセンター長)

- ・子供から相談されたことや支援のスキルなどについては、知識や経験が豊富なコーディネーターに気軽に相談をしてもらい、支援する学生が一人で悩まないような体制を作っていく。

(藤本 沖縄振興局長)

- ・運営に参加する学生の確保はどうしているか。

(城間 琉球大学3年生)

- ・学生ボランティアは6名登録されており、確保についてはまだ問題ではない。参加する子供の人数が少ないのが現状。

(比嘉 名城大学3年生)

- ・毎年2回行われるボランティア集会において、10分ほどで名護市学習支援教室ぴゅあの設立経緯、活動内容、対象となる中学生等について説明を行う。興味のある学生にはエントリーシートを配布し、教室長、副教室長による面談を行い、学生の確保をしている。

(島尻 内閣府特命担当大臣)

- ・ ボランティアセンターの立ち上げに当たり、厳しい学生たちの経済状況を考えると学生の派遣費用等は必要であるという声があった。私たちもそのことについて考えなければならない。
- ・ 運営をする上での交通費や謝礼など経済的支援のニーズ、またコンソーシアム沖縄や大学側へのリクエストについてうかがいたい。

(石井 名城大学4年生)

- ・ 学生は、勉強や生活費のためのアルバイトなどもしないといけない。本心は無償のボランティアとして行いたいですが、現実的には厳しいものがある。
- ・ 1回の活動で1000円頂いているが、準備や次回に向けての反省をすると6時間は拘束される。もう少し待遇がよくなればやり手も増えるのではないか。

(渡嘉敷(初) 沖縄国際大学4年生)

- ・ 宜野湾市からは交通費のみ頂いており、学生は実質無償で活動を行っている。
- ・ 有償ボランティアにすると、学習応援という形が変わってしまうのではないかという意見が学生から上がっており、もしそうするのであれば、有償ボランティアという意味をしっかりと考えないといけない。

(仲村 琉球大学大学院1年生)

- ・ 学生ボランティアセンターへのリクエストとしては、福祉や教育関係の学生だけではなく、幅広い分野からの学生ボランティアを募集すること。そうすることによって子供たちのニーズにも応えやすくなるのではないか。

(島尻 内閣府特命担当大臣)

- ・ 大学コンソーシアム沖縄のボランティアセンター立ち上げに関しては、関係の先生方に感謝を申し上げる。
- ・ 学生ボランティアセンターの運営をしっかりと行い、子供たちのために施策が行われなければならない。引き続き学生の皆様に協力していただきながら沖縄子供の貧困緊急対策事業に取り組んでいきたい。

(大城 副代表理事)

- ・ 学生ボランティアセンターが継続して活動できるようにしたい。

- ・学生の強みは子供との距離が一番近いこと。子供への支援の中で何かに悩んだら、相談できる相手がセンターにいるのですぐに相談してほしい。

(以 上)